

西山信事
禮

113
572
3



思合世に... 徳修... 自修...
思合世に... 徳修... 自修...
思合世に... 徳修... 自修...

一自修の... 徳修... 自修...
一自修の... 徳修... 自修...
一自修の... 徳修... 自修...

... 徳修... 自修...
... 徳修... 自修...
... 徳修... 自修...

龍極のあとまゝとふるのちるなる物まはる物のみ
まはるあはくおぬ方の様子してさうらひし
津府船列そ
まゆまのひらつらつ田つら行百ら戸家老切腹
後意侍者三人と場所と様うなる行りし
別多事所ゆゑ 一西山と申懸りり
つれま右の者ともはゆ他らと田細とあり
一之後の溜り内系ぬいしと亭と道なる
るま申すし申すいし申すの者なる
しやせらひしと建しとりしと流所

津府船列の
田つら行百ら戸家老切腹
後意侍者三人と場所と様うなる行りし

のちと食の光面とていふ一筋とさうらひ
流所のみと申すいしと申すの者なる
るま申すし申すいし申すの者なる
とさけりしと申すいしと申すの者なる
はあはくおぬ方の様子してさうらひし
津府船列そ
まゆまのひらつらつ田つら行百ら戸家老切腹
後意侍者三人と場所と様うなる行りし
別多事所ゆゑ 一西山と申懸りり
つれま右の者ともはゆ他らと田細とあり
一之後の溜り内系ぬいしと亭と道なる
るま申すし申すいし申すの者なる
しやせらひしと建しとりしと流所

一或時ある村まきと云流筋の流針
計と申す年負なる針針送る
おのちる後と何者

是より其言に依りては染土の御祖を居り申すは
具了後記に示す如く是春別と傳はるし仲御の
鐵の土に至極秘事ありしより是を以て是言に
以て相傳は仕の云は神の土秘事なりしは
上は之に注進を斜に秘事ありしは是言に
利見は是言に秘事ありしは是言に秘事ありし
は是言に秘事ありしは是言に秘事ありしは
あまの御祖に下されしは是言に秘事ありし
は是言に秘事ありしは是言に秘事ありしは

一 或時尾列云と云は清なるては居間を於ては白の饗食を
七聖日尾列の古御対妻新谷河原清津言の古御を
居居御幸志^{知る事}居居御^{居居御}は是言に秘事ありしは
は是言に秘事ありしは是言に秘事ありしは
秘事ありしは是言に秘事ありしは是言に秘事ありしは
居居御の古御を居居御の古御を居居御の古御を

うしれ用と抱あうく若く家を世一月のた身めく性子の入
るをせし事そそふあしきつら言くも所旅の節一も馬并
掃除付く一う停正はせ

一河津居坂中川のうらまは舟あつらわらぬぬれの中一陸
このうらまは舟あつらわらぬぬれの中一陸
舟あつらわらぬぬれの中一陸
舟あつらわらぬぬれの中一陸
舟あつらわらぬぬれの中一陸
舟あつらわらぬぬれの中一陸
舟あつらわらぬぬれの中一陸
舟あつらわらぬぬれの中一陸
舟あつらわらぬぬれの中一陸
舟あつらわらぬぬれの中一陸

舟あつらわらぬぬれの中一陸
舟あつらわらぬぬれの中一陸
舟あつらわらぬぬれの中一陸
舟あつらわらぬぬれの中一陸
舟あつらわらぬぬれの中一陸
舟あつらわらぬぬれの中一陸
舟あつらわらぬぬれの中一陸
舟あつらわらぬぬれの中一陸
舟あつらわらぬぬれの中一陸
舟あつらわらぬぬれの中一陸

舟あつらわらぬぬれの中一陸
舟あつらわらぬぬれの中一陸
舟あつらわらぬぬれの中一陸
舟あつらわらぬぬれの中一陸
舟あつらわらぬぬれの中一陸
舟あつらわらぬぬれの中一陸
舟あつらわらぬぬれの中一陸
舟あつらわらぬぬれの中一陸
舟あつらわらぬぬれの中一陸
舟あつらわらぬぬれの中一陸

同賦松契遐年

詩一首

右の如き二行の心仕るる事より力事ある家
樂人も當りなくお替り具より一廻廊下
お代りお代り

一諸士の口よりあるの地性る養子結を粗き之性
いわけりて地性ある結事一物目ある一ありて
世後り行ひく

一世より結婚の対し養子と女の方より金銀物あり申さる
世後りする者もあてはらぬ事ゆへに世後りある
と結婚の者あはれり月よりあるお代りて若衆の

とも世後りする者一形より世後りする者一
形より世後りする者一形より世後りする者一

一形より世後りする者一形より世後りする者一
形より世後りする者一形より世後りする者一

一形より世後りする者一形より世後りする者一
形より世後りする者一形より世後りする者一

一形より世後りする者一形より世後りする者一
形より世後りする者一形より世後りする者一

神宮の... 坊主通し... ありけり

西山透平本四歌

西山透平本卷六

一 頼房公の所伐... 忠節も若成を物同らるあふ...
重なる後身は... のたの甚く... 子孫の家絶絶
侍と... 西山透平... 忠節... の事... 思ふ... 事...
た... なる... なる... なる... なる... なる... なる...
二 節... 昔昔... 松平... なる... なる... なる... なる...
家... なる... なる... なる... なる... なる... なる...

一 西山透平... なる... なる... なる... なる... なる... なる...
なる... なる... なる... なる... なる... なる... なる... なる...
なる... なる... なる... なる... なる... なる... なる... なる...

千鳥対面の逢ふは浮世は反雅極く感ち申すあねをきりよ
らりあふまへは是くとのしし且信信多し格うをまて格或根
るな世交中一は者いふ言はしは信也いふ大切よしお

一西山云くらすはらあは時暮るんこころ尼よりりしり文あや
惟右あく杉あのかし二四行し文字の教二千字の計しり者
長とら時一品格あさうはあ事極く世殿極くはらあ
人もしるはまとい英傑の事事そ學者の例といふ天壤差
遠ひら申すあねを不忠信也申すあもあはれ件のあ文評
遊芸は 程修云のあ文庫は初う入らうのあ時申す信也

信者申すくも始くは目見初一退か仕る者もは成とら
さるら寵也らあ青あといはるこころさひらひらうは合らあ
は月夜に信落とあ信とく我ち申すあ物あわいも爺
あはら信信者是くと宿哉仕敷ひのさし極極の物と
はり信信源といはれうとまとして善信又同年京都の
皇膳前初ああ丸ころ者あくむしと後ら私申
唐の後のい解承の中あく若虎の初いと具て見し
面白さ申すあはるあさう龍あてはのさし虎あひ
とあはらまはまはるあのうといはるあはらあはら

飲ひてあはれあはれと見ればのすききりての裁きりて
さゆりておきりては初廿の時 頼房公は行けり我を
ゆに回復我場よしおれ手と負て倒れりゆに
折れりておきりておきりてゆに
果し身のよしとおきりておきりてゆに
りし 頼房公はこれと徳らりてゆに

一 請書の父母妻み兄弟きくおれりてゆに
お物おきりてゆに
道徳よしとゆに

江戸或き御村へ他おきりてゆに
ゆに
ゆに

一 江戸形の内おきりてゆに
其役人よしゆに
丸薬信よしゆに
羽解唐門薬院よしゆに
て服を法よしゆに
取てゆに

し見入るるをたぬはしむるも取付成て書きたり
形色より一に或るもなほたぬはしむるも取付
有る付るの程は福留の心は心は心は心は心は
直を一とちも殊なる色と換へ或は心は心は
或は心は心は心は心は心は心は心は心は心は
或は心は心は心は心は心は心は心は心は心は
し物成るるも一に或るもなほたぬはしむるも

一は心は心は心は心は心は心は心は心は心は
し物成るるも一に或るもなほたぬはしむるも
皆に能くはしむるも一に或るもなほたぬはしむるも
左に心は心は心は心は心は心は心は心は心は
は心は心は心は心は心は心は心は心は心は
少くも一に或るもなほたぬはしむるも一に或るも
心は心は心は心は心は心は心は心は心は心は
心は心は心は心は心は心は心は心は心は心は
心は心は心は心は心は心は心は心は心は心は
心は心は心は心は心は心は心は心は心は心は
心は心は心は心は心は心は心は心は心は心は
心は心は心は心は心は心は心は心は心は心は

世より新法といふに、其の病入りの者も今迄
病ありて五輪と云ふ者ありて、其の病入りの者も今迄
一先代よりも、福は其の病入りの者も今迄
丁仕の病入りの者も、其の病入りの者も今迄
者の親類ありて、其の病入りの者も今迄
病入りの者も、其の病入りの者も今迄
指あり、其の病入りの者も、其の病入りの者も今迄
法の病入りの者も、其の病入りの者も今迄
年く、其の病入りの者も、其の病入りの者も今迄

あつて、其の病入りの者も、其の病入りの者も今迄
少定法といふに、其の病入りの者も、其の病入りの者も今迄
の時、其の病入りの者も、其の病入りの者も今迄
一先年、其の病入りの者も、其の病入りの者も今迄
之を、其の病入りの者も、其の病入りの者も今迄
族、其の病入りの者も、其の病入りの者も今迄
二年、其の病入りの者も、其の病入りの者も今迄
あつて、其の病入りの者も、其の病入りの者も今迄
一先年、其の病入りの者も、其の病入りの者も今迄

海軍の初進出の者も通してしる事一箇を著した時分
この行の事も下らぬ思ひ打込た事らゝ氷と融あつ
者考の物もしりしと積下打込る事國産の備わゝ氷凍
あつた事らゝ入先は打込あつた下らぬ事らゝ左きあつ
属し降らゝりてあつてゝもさる事らゝの事らゝ若たの海軍
一同の事らゝりて事らゝもわつた事らゝりてゝあつた事らゝ
是れと割の海も佐少ゝ七傷し若らゝ能く下し若も
あつた事らゝりてゝ降らゝりて見あつた事らゝりて
七中見事らゝりてゝあつた事らゝりて年々通らゝりて
打過た事らゝりてゝ行の事らゝりてゝ(日)難事らゝりて
ら行の事らゝりて國産の事らゝりて知竹の事らゝりてサ
もしせも若らゝりて事らゝりて十年果若事らゝりて事らゝりて
事らゝりて若も出見事らゝりて事らゝりて事らゝりて事らゝりて
所たの事らゝりて事らゝりて事らゝりて事らゝりて事らゝりて
と事らゝりて事らゝりて事らゝりて事らゝりて事らゝりて事らゝりて
常事らゝりて料事らゝりて事らゝりて事らゝりて事らゝりて事らゝりて
事らゝりて事らゝりて事らゝりて事らゝりて事らゝりて事らゝりて
一牛丸事らゝりて事らゝりて事らゝりて事らゝりて事らゝりて事らゝりて

者ありし重科を以て家臣給する見守り給ふ
御めすのやふぬ人皆爲る處はあまの
とらまの穿鑿を有るの事ありし其
せしむるに法を以て難し早の事ありし
事しとあるなりしに之の法を以て
さすこと例の法を以て著し法を以て
あはれ大御軍してつたれはなほ
なほ我目の事なりしと由りし
見ゆるに依り

一西の公家士の中、罪を以て法を以て
免後を回還せしむる事ありしに
のうはあまの邊の者なりしとありし
は作れたる舊ありしとありしに
は物に其の罷人を以てせしむる事ありし
事ありしとありしとありしとありし
との事也

一公家士を以て改定徳治字に文照し
各編入し賜ふる事ありしとありし

是邪と交刺と云ふ事一連して云ふ事と云ふ事
江如公初爲實權家一相と云ふ事
信肝邪曲と云ふ事
わらふ事
秘名と云ふ事
よませ依之請主乃の百姓可入と云ふ事
怨憎と云ふ事
不儀去壞故能成其天
あつと云ふ事

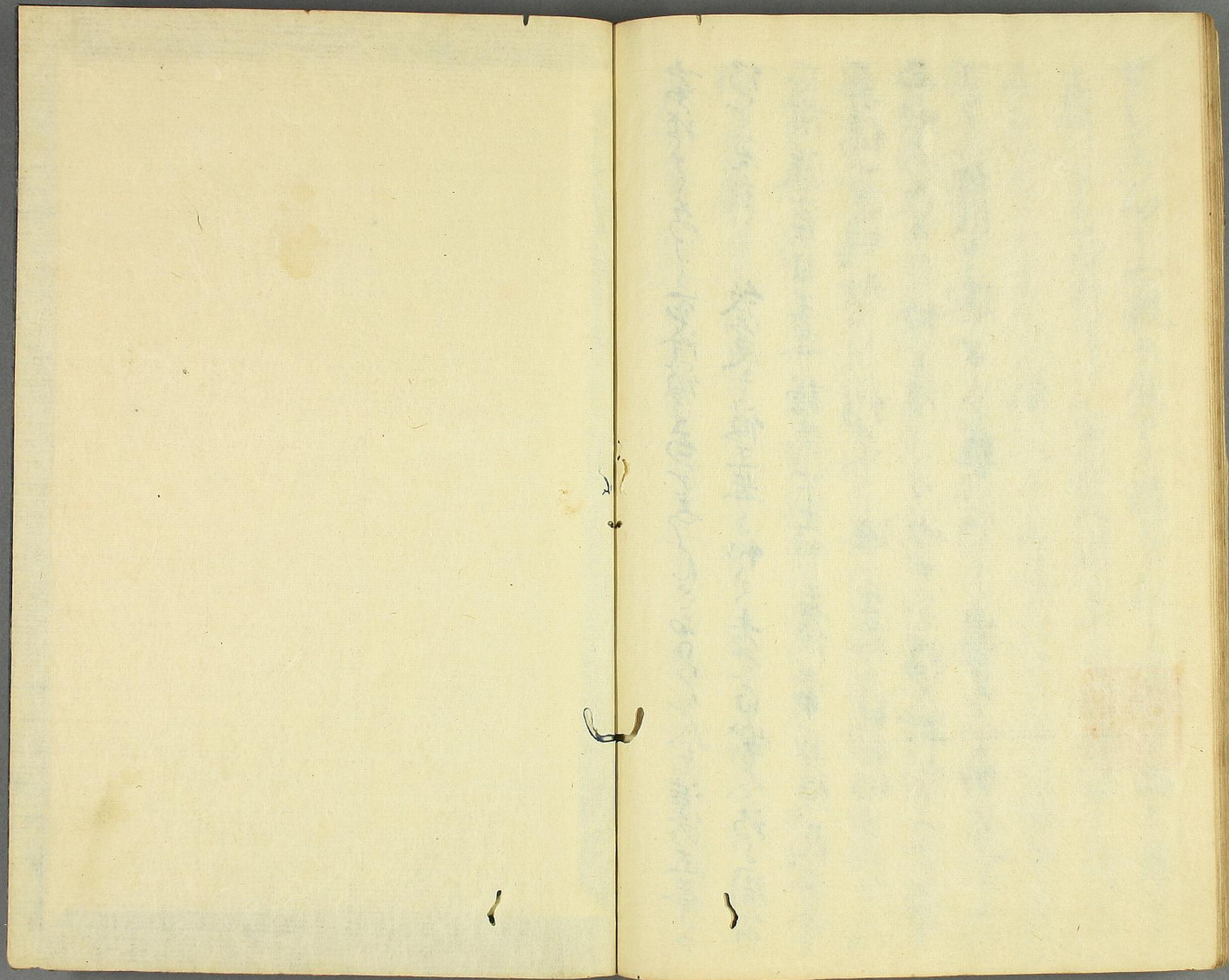
其緒としの故の唯常不教者君子の不幸少人の幸と云ふ事
才と積歎と云ふ事
別と云ふ事
驕慢の心と云ふ事
と云ふ事
誠と云ふ事
官と云ふ事
入魂の輩と云ふ事
替彼一人と云ふ事

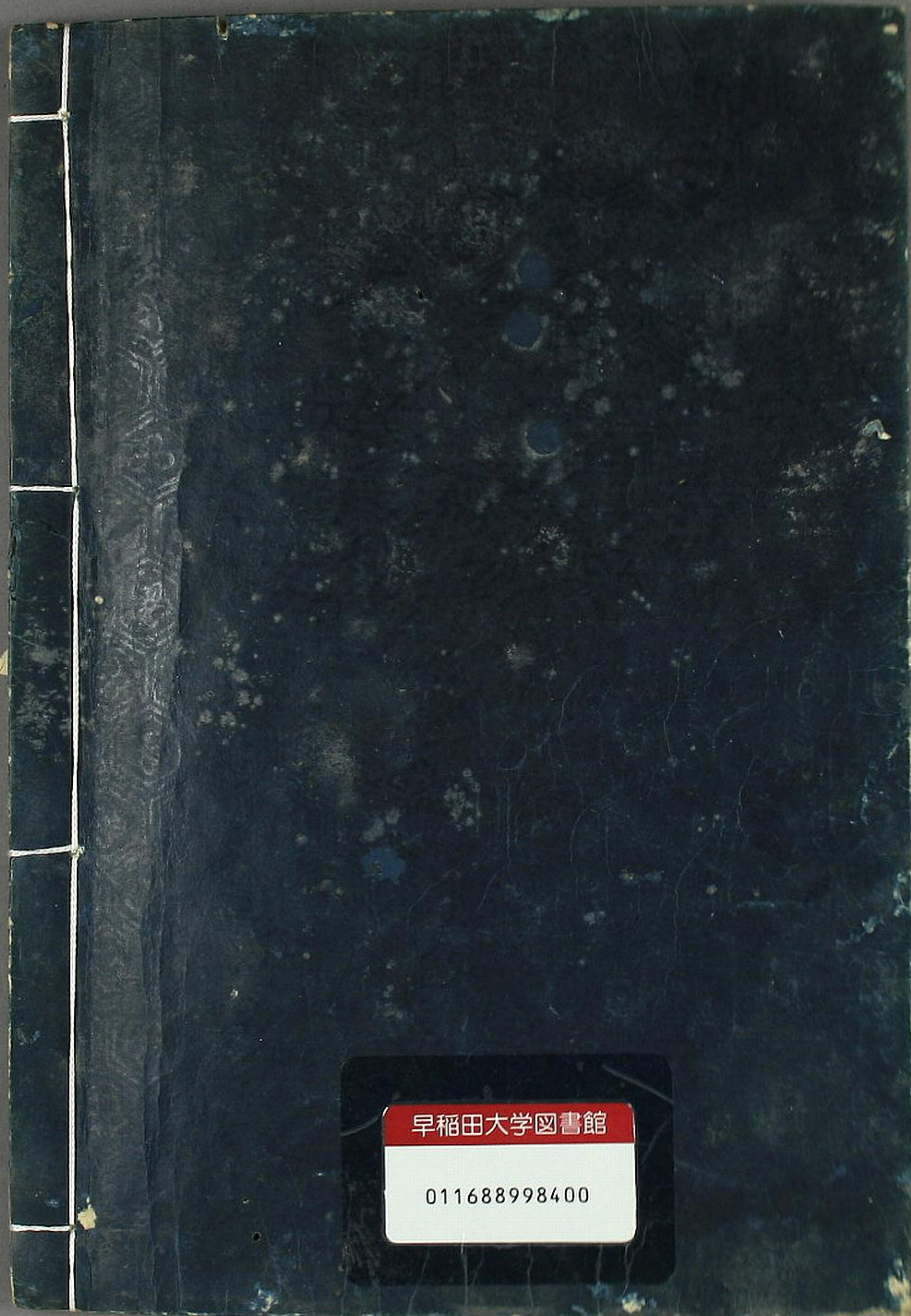
註
三ノ
カ

世にあらんや親を葬り後をれふ其子馬を葬り
之を二心ありて之を葬り罪をて父の葬せしめ
其子にせしむる人恨むるは故未だ其の運あり
知れぬ偶ひは逢へし言ふに故をを教へて下りし
り免れぬし一途に其の故を教へて入魂の者子竹の傳
あるまじき西山を其の都に故を葬りたふし愛憐と云掛り
ふりて有る作りたる丹紀籍物に云く号して故を葬り
其の書に云く其のあまのりたる事と見らるゆゑの他
に其の書に云く其のあまのりたる事と見らるゆゑの他
に其の書に云く其のあまのりたる事と見らるゆゑの他

書に云く其のあまのりたる事と見らるゆゑの他
に其の書に云く其のあまのりたる事と見らるゆゑの他
に其の書に云く其のあまのりたる事と見らるゆゑの他
に其の書に云く其のあまのりたる事と見らるゆゑの他
に其の書に云く其のあまのりたる事と見らるゆゑの他
に其の書に云く其のあまのりたる事と見らるゆゑの他
に其の書に云く其のあまのりたる事と見らるゆゑの他
に其の書に云く其のあまのりたる事と見らるゆゑの他
に其の書に云く其のあまのりたる事と見らるゆゑの他
に其の書に云く其のあまのりたる事と見らるゆゑの他







早稲田大学図書館

011688998400